

## ウンシュウミカン ‘今村温州’ の生育, 収量および 果実品質に及ぼすヒリュウ台木の効果

堀江裕一郎・大庭義材<sup>1)</sup>・松本和紀・乗原 実<sup>2)</sup>  
(福岡県農業総合試験場園芸研究所<sup>1)</sup> 福岡県農政部<sup>2)</sup> 福岡県農業総合試験場果樹苗木分場)

Yuichirou HORIE, Yoshiki OBA, Kazunori MATSUMOTO and Minoru KUWAHARA:  
Effect of Tree Growth, Yield, and Fruit Quality of ‘Imamuraunsyu’ on Hiryu Rootstock

前報<sup>1)</sup> でハウス高うね栽培において, ヒリュウ (*Poncirus trifoliata* Raf) をカンキツの台木として利用した場合の効果について報告した。今回は, 露地栽培でウンシュウミカン ‘今村温州’ の生育, 収量および果実品質に及ぼすヒリュウ台の効果について検討したので報告する。

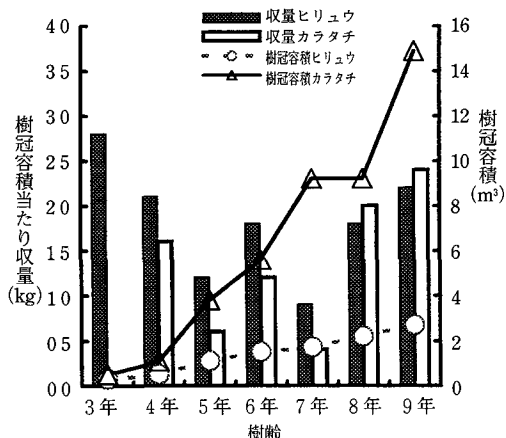
### 1. 材料および方法

1990年4月, ヒリュウとカラタチの3年生実生に ‘今村温州’ を接ぎ木し, 苗木を育成した。1991年5月, 場内のは場(花崗岩質の砂壤土) にヒリュウ台13本, カラタチ台5本を4.5m×5.4mの間隔で栽植した。施肥は福岡県の樹齢別施肥基準に準じて有機配合(N-P-K 6-6-5)を両台木とも同量施用した。樹冠容積を10月, 果実収量, 品質を毎年12月中旬にそれぞれカンキツの調査方法(農林水産省果樹試験場興津試支場編1987年)に準じて調査した。また, 1997年と1998年は果実品質の時期別推移を調査した。

### 2. 結果および考察

樹齢9年のヒリュウ台 ‘今村温州’ の樹冠容積は2.7m<sup>3</sup>とカラタチ台14.9m<sup>3</sup>の約2割となった。ヒリュウ台は樹齢3年から結実を始めたが, カラタチ台は結実が1年遅れた。ヒリュウ台の樹冠容積当たり収量は幼木期で安定して多かった。カラタチ台は幼木期の収量が少なく, 樹齢8年以降に多くなった(第1図)。1樹当たり収量はカラタチ台, ヒリュウ台とも年ごとに増加し, 樹齢5年から9年まで5年間の累積収量はヒリュウ台で14.9kgとカラタチ台63.2kgの約2割となった(第1表)。

平均果実重は台木間での明らかな差はみられなかった。



第1図 樹冠容積と樹冠容積当たり収量

1996年から1998年の3年間の果実階級割合はヒリュウ台でL果が37.8%, 2L果が35.6%, M果が14.3%であった。一方カラタチ台は2L果が39.1%, L果が31.6%, 3L果が18.1%と大果の割合が高かった。これは結実量が少ないことに起因すると考えられた(データ略)。

5年間の果実品質をみると, ヒリュウ台の果皮色と果実糖度はカラタチ台に比較して明らかに高かった(第1表)。カラタチ台の果実糖度は樹齢の進行に伴い, 高くなった。一方, ヒリュウ台は樹齢に関わらず, 果実糖度は安定して高かった。クエン酸含量は, 年次間では差がみられたが台木間では明らかな差はならなかった(第1表)。ヒリュウ台とカラタチ台の果実糖度の推移を調査した結果, 7月時点でヒリュウ台とカラタチ台に差が表われていて, その差は収穫時まで続いた。クエン酸含量の推移は, ヒリュウ台で減酸がやや早い傾向があるものの台木間の差はみられなかった(データ略)。

以上のことから, ヒリュウを台木として利用した ‘今村温州’ の露地栽培は, ハウス高うね栽培同様, 樹冠容積がコンパクトになり, 樹冠容積当たりの収量が多くなることに加えて, 早期結実性が高く, 果実品質は幼木期においても安定して優れていることが明らかになった。

### 引用文献

- 1) 堀江裕一郎 大庭義材 角 利昭 乗原 実: 九農研 61, 218, 1999

第1表 台木の違いによる ‘今村温州’ の果実収量と品質

年度	樹齢	1樹当たり収量 <sup>a)</sup>		果皮色 <sup>b)</sup>		果実糖度		クエン酸含量	
		ヒリュウ	カラタチ	ヒリュウ	カラタチ	ヒリュウ	カラタチ	ヒリュウ	カラタチ
		(kg)	(kg)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
1994	5	1.4	2.3	8.4	7.6	12.1	9.7	0.89	0.81
1995	6	2.4	6.5	7.9	6.1	12.1	9.1	1.26	1.16
1996	7	2.1	3.1	7.6	5.6	12.2	9.7	0.96	1.09
1997	8	3.8	18.1	8.7	8.4	12.3	10.6	0.93	1.00
1998	9	5.3	33.2	8.5	8.2	11.3	10.5	0.79	0.87
計 平均		14.9	63.2	8.2	7.2	12.0	9.9	0.97	0.99
分散分析 <sup>c)</sup>									
台木		**		**		**			NS
年度		**		**		*		**	**
台木×年度		**		**		**		**	**

注) a) 着果した全樹の平均, 平均の項は累積収量

b) 果皮色はカラーチャート(農水省果樹試験場編)指数

c) \*は0.5%水準, \*\*は0.1%水準で有意差有り